

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

| | |
|------------|---|
| Title | Datif Expletif <一般> |
| Author(s) | 屋敷, 睦美 |
| Citation | 広大言語 , 7 : 51 - 55 |
| Issue Date | 1967-12-18 |
| DOI | |
| Self DOI | |
| URL | https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00046272 |
| Right | |
| Relation | |



現代に於ける文章語（小説など）と口語の否定表現の比較検討をしてみるとおもしろいように思える，がしかし日本に居ては現代口語の実状を知ることは困難だし，少々調べた限りでは，普通の作家（特に俗語を好んで使う作家を除く）には，ほとんどと言つてよいくらい pas のみによる否定形式は用いられていない。次に，16，17，18世紀あたりの否定表現の状態を見てみると，或る意味でその盛衰の epoch を示しているような気がする。ここを中心に pas, point, rien, jamais etc. 群と nul を比較対照しながらもつと詳しく調べてみるとおもしろいかも知れない。

— 了 —

Datif Expletif

屋 敷 睦 美

私達は，フランス語の中でしばしば次の様な表現に出会うことがあるだろう。

- Regardez-moi ça. （ね、あれを見て！）
- Qu' on me l' egorge tout à l' heure !
（ああ、たった今彼を殺したなんて！）
- Tu m' as l' air gaillard ce matin.
（今朝は、ばかに元気そうじゃないか）
- Qu' on nous le pende !
（ああ、彼を絞首刑にすとは！）
- Je te les ai fouettés de la bell façon !
（私は相当なやり方で、彼等にムチ打ちの刑を与えてやつたんだぜ）
- Son petit nez vous a un air fripon.
（彼の小さな鼻は、一くせありそうに見える）

このような表現に於ける moi, me, nous, te, vous などの第一および第二人称の間接補語代名詞は，関心を表す補語として虚辞的 (expletif) に用いられており，それ本来の働きに対して二次的なものであるが，ここに少しばかり紹介したいと思う。

それは，いわゆるラテン文法におけるシンタクスの中で，“Dativus ethicus” と称せられるものである。この datif は，最初に持っていたと考えられる文法的価値を消失してしまつたので，これがあるのとないのによつて生じる文中での差は大きなものではないと，い

つてもよいが、文全体に *élément affectif* を加味する働きを持つていることを、私達は見逃してはならないであろう。F. BRUNOT の「La Pensée et la langue」では、この代名詞は *Complément d'intérêt atténué* の名称を与えられている。この *pronom* は、文中で述べられる行為あるいは動作が、その人称代名詞なる人物に、真に及ぶことを示すためのものではなく、いわば何らかの意味において、その行為が、話者により関心を持たれることを表現するのであり、あるいは又、聴者に何らかの注意を起させて、漠然と知らず知らずのうちに相手を話の渦中に巻き込もうとする働きを持つものである。そして私達は、話、あるいは文の全体にきわめて親密な調子を感じ得るのである。

• Vous allez me prendre ce chien et le mettre dehors.

(犬を外に連れ出してくれないか)

• Rangez-moi tes cahiers immédiatement.

(お前の帳面をすぐに整理してくれ)

上の二つの例からわかる様に、犬を連れ出そうとする行為、又、帳面を整理するという動作は、*me, moi*、すなわち話者によつて行われるのではなく、話者自身の意志が *vous* において為されようとするのである。このような言いまわしは、以前はずつと一般的なものであつた。そしてその用法の度数はだんだん減つてはきたが、今だに私達はそのような表現をひんばんに見出すのである。今、*me* の例をあげたが、第二人称の用法も第一人称の用法と同じようにして、もはや話者ではなく聞き手が、物語に於て喚起される関心を示すのである。

• Ce maudit gamain m' avait fait un pieds de nez : je cours après lui, je te l' attrape, je te le gifle d' importance. (そのいやなやつは、私を嘲笑した。あいつの後を追つかけて、ひつとらえてほつべたをしたたか打つてくれん。)

しかしこのような代名詞の役割を分析することは、時には非常に困難でさえある。たとえば、*Chassez-moi ce coquin.* (この悪党奴を追い出して下さいよ)における *moi* は、*pour moi* の意味にとつてもさしつかえがないようにみえる。歴史的にみるとこの *datif ethique* の用法は、“～の為に”という意味の *Complément d'intérêt* としての *pronom* の用法から出来ていて、それがだんだん弱くなつて、ついにはもとの *pour*～の意味がなくなつたのである。最初は論理的、文法的意味をもつていたものが次第にそれを失つて感情的意味をもつようになつた。次の三つを参照されたい。

• Faites moi ce travail = Faites ce travail pour moi.

(私の為にこの仕事をして下さい)

• Fermez moi cette porte. (どうかこの門を閉めて下さいな)

• Fichez moi le camp et tout de suite!

(早いとこ、ずらかろうぜ)

このことは、英語の ethical dative についても同様である。

• Corbier...cela vous est minisre.

(コルビエール...ありや、大臣級の人物だよ)に於ける vous は、話者の賛嘆の感情を示している。又次のような例における vous は、datif ethnique としてよりはむしろ on を意味する目的補語と考えるべきであろう。

• Ce romain, il vous fait dresser les cheveux sur la tête, il vous donne de mauvais rêves.

(この小説を読めば、人々は(読者)は髪の毛を逆立たせ悪夢を見るだろう)

仏民衆語の中では、又、次の様な表現が、しばしば聞かれるらしい。

• Notre homme saisit la corde qui pendait hors de la fenêtre, et je te tire! mais la corde ne céda pas.

この je te tire という表現は、その場の情景をより髣髴とさせたいということから、語り手が私達に表現したい動作を、その動作者に置き代つて示すらしい。そして物語を聞いている人達に興味をおこさせる為に、二人称の te を加えるのである。

• Si c'était mon fils, je te le dresserais. vous も te 同様であるが、民衆語に於ては te の方が expletif として vous よりも多く用いられるとのことである。古典語に於ては me と vous が同時に続いて出てくることが多い。

• Dont la méchante à chaque fois quelque ame là dedans entre, vous me la frotte dos et ventre.

さらに今日日常語にあつては、人々は次の様な te, vous の重複的な言いまわしをする。

• Moi je te vous lui aurais coupé la margoulette en quatre pour commencer.

(まず手始めに彼のあごの $\frac{1}{4}$ を切り取つてやろう)

• Je te vous les prends.

• Avez-vous vu comme je te vous lui ai craché à la figure?

(私が彼の顔につばを吐いたのを、あなたはどう思われますか)

- Il te vous les sabrait de crayon rouge et de crayon bleu.

(彼はそれを赤鉛筆と青鉛筆で抹殺した)

この様な *datif ethnique* なる用法は、古代ギリシヤ語及びラテン語等の古典語に於ては、ひんばんに用いられたようであるが、近代語にあつては仏語、英語の外に独語にもその表現がみられる。市河三喜博士の英文法研究によれば、英語におけるこの様な用法の最古の例は十四世紀らしくその後 Shakespeare の作品にはかなり幾度も使われているようである。そしてそれ等がほとんど *Superfluous* なものになつてはいるが何らかの感情的要素を文中に加味するということは仏語同様である。

- Put me on this white coat.

(まずこの白い着物をきなさい)

- She puts me her white hand to his chin.

(あれ、あの女が男のあごに白い手をあてている)

仏語あるいは独語においては、この様な表現がしばしば民衆語に見い出されるのに対して、英語においてはもはや *ethical dative* は今日 *absolute* で、唯古語として時々詩などに使われることがある位のようなのだ。今日では、それに対応するものとして *lo, behold, look, look you, mind you* を用いるらしいがその目的は同じであつても、使用の場合には大きな差があるようだ。

独民衆語に於ても、さまざまなニュアンスを伴つて感情関与の *Dativ* が好んで用いられる。

- Du bist mir ein netter Kerl

(お前は、なんて可愛いやつだ)

- Gestern habe ich dir etwas Merkwürdiges erlebt.

(昨日私は、非常に奇妙な事に会つたんだよ)

独語においてこの様な *Dativ* は、ただ偶然的に、あるいは作者の意図により使用されるが、ある言語にあつては、一つの規則的な、欠くことのできない動詞への付加物として用いられることもあり、Havers は次の様に述べている。「たとえばバスク語のその様な表現に於ては、シュハルトの言葉によれば、全く精神的なものが、なんだか全く皮相的なものになつている。」この *dativus ethicus* と平行して、Havers は次の様な、いわゆる “*Gemütllichkeitsspossessiv*” を取り上げている。

- Er raucht sein Pfeifchen.

・ trinkst sein Schöppchen.

・ Mein Fritzchen lieb sich das nicht zweimal sagen..

そこでは、外界の事物あるいは人を述べるのに、所有形が用いられているが、この様な possessif は私達にとって、より人間の心を動かし、その言いまわしは、より暖かみのある、清換豊かなものになっているのである。

こうして“ Dativus ethicus ” という一つの、ささいな現象を、眺めてきたのだが、私達の言語生活において、聞き手の心の中に入り込んだものが、直接に聴取された語に結びつけられる概念ではないということは、しばしばありがちなことである。すなわち、むしろ語なる資材、言語材料は、言わば、ただ話者から聴者に伝達されるべき感情への導線として、使われているということに、私達は注意せねばならないであろう。

続 ・ 言葉の四っ角

古 浦 敏 生

「広大言語」第6号における拙稿「言葉の四つ角」は、ある程度以上面白かつた、との評があつたので、今回も執筆することにした。

昨年11月23日の朝日新聞には、次のような記事が出ていた。『妻をしめ殺す。生活苦の運転手。22日午前1時10分頃、広島市荒神町、高田 穰さん(37)が「知人が夫婦げんかのすえ妻を殺したらしい」と広島東署に届けた』とあつた。この文章は2通りに解釈できる。

- (1) 知人の妻が殺された。
- (2) 高田さんの妻が殺された。

どちらが正しいかは、この記事の続きを読まねばわからない。即ち、「同署が広島市稲荷町、自動車運転手〇〇(28)方に行つたところ〇〇の妻、君子さん(34)がフトンの中で死んでいた」。

ある友人から年賀状が届いた。「あけましておめでとうございます。……挙式以来、早いものでもう9ヶ月たちました。おかげ様で深い感謝と共に新しい年を迎えたこの幸せを心にしつかり銘記して今年こそは立派な社会人に、なるべく努力するつもりであります。……」。